

くらもりねこ 蔵守猫の話

作：富安陽子

ユウ太が蔵守猫に会ったのは、四年生の夏休みが終わろうという土曜日のことでした。

ユウ太の家の裏には畳三畳分ほどの小さな畑があって、その畑と母屋の間に古い蔵が建っています。

その日、公園で遊んだユウ太が家に帰ってみると、お母さんの姿が見当たりません。

「畑に行ってるのかな？」

そう思ってユウ太は家の裏に回ってみました。そしたら、蔵の扉が開いているのが見えたのです。いつもはぴたり閉まっているはずの重たい蔵の扉が——。何か用があってお母さんが蔵に入ったのかな？とユウ太は思いました。

「お母さん」

開いた扉から中を覗いてみましたが、お母さんはいません。でもその時、うす暗い蔵の奥で何かぴかっと光るのが見えました。

なんだろう？と気になってユウ太はそっと蔵の中に入ってみました。高い所にある明かり採りの窓から赤く染まった夕暮れの光がさしこんで暗い蔵の中をぼんやり照らしています。一歩二歩と蔵の中を奥に進み、目を凝らしたユウ太はハッとして立ち止まりました。

猫です！まっ黒い猫が、黒いカバンの上にちょこんと座ってこっちを見えています。置き物ではない証拠にヒゲをピクピク動かしています。光ったのは猫の目でした。おまけによく見ればその猫の目は、片方が金色、もう片方が銀色をしているではありませんか。

怖くなってユウ太が一歩後ずさると、猫は金銀の両目を細めました。そして、なんと口をきいたのです。

「おや」と猫は言いました。

「あなた、あたしが見えるのですね？」

「ね…猫がしゃべった…」

ユウ太がつぶやくと猫はまた、おじさんともおばさんともつかぬ声で「ほう」と言ってしっぽを振りました。

「おまけに、あたしの声まで聞こえる」

「ば、化け猫だ」

ユウ太はもう怖くて怖くて逃げ出したかったのですが足がすくんで動けません。そんなユウ太に向かって猫はまた口をききました。

「失礼な。あたしは化け猫ではありません。蔵守猫(ねこ)です。蔵守と申しますのはね、蔵の番人ということです。古い蔵には、たいがい蔵守がおりますよ。蔵にしまわれた物語の番をしているのです。ただ、蔵守の姿が見えるという人は珍しいのですけれど、どうやらあなたはその珍しいお人の方ですね」

そう言う猫は気取った様子でペロペロと前脚をなめ始めました。ユウ太は、落ち着きはらっている猫にこわごわ聞いてみました。

「蔵にしまわれてる物語って、なに？ここにしまっているのはガラクタだけだけど……」

猫は脚をなめるのをやめ、キッと顔を上げました。

「ガラクタなんて言うてはいけません。ここにしまわれているのは捨てられない物なんですからね。捨てることができない物にはね、忘れられない物語がくっついているんですよ。“思い出”と言ってもいいでしょう。あたしは、それがなくなってしまうように守っているのです」

ユウ太は、ごたごたと荷物が積み上げられた蔵の中を見回してみました。使われなくなったタンスだの三輪車だの火鉢だの……。こんなつまらない物に、忘れられない物語がくっついているなんて本当かな？と思ったのです。すると猫は、まるでそんなユウ太の心の中を見すかしたように言いました。

「おや、信じられないようですね？では証拠を見せてあげましょう。蔵の中から何か一つ品物を選びなさい。そうしたらあたしが、その品物にくっついている物語を話して聞かせてあげますから」

蔵守猫がそう言ったのでユウ太はもう一度うす暗い蔵の中をきょろきょろ見回しました。そして、たくさんあるガラクタの中でも一番つまらなさそうな物を見つけ出しました。ゴツゴツと節くれ立った太い木の棒です。杖にするにはよさそうですが、杖のような持ち手も何もありません。誰かが道ばたでひょいと拾ったような木の棒を指さして、ユウ太は猫に言いました。

「じゃあ、この棒はどう？」

ユウ太の言葉を聞いた猫の金銀の両目がピカリと光った気がしました。

「いい物を選びましたね。この棒にはとても面白い話があるですよ」

そう言うと蔵守猫は、木の棒にまつわる物語を話し出したのです。

「あなたのひいおじいさんの健作さんが、まだあなたのお父さんぐらいだった頃の話です。その頃、あなたの家の裏には今よりずっと広い畑がありました。畑の作物に肥料をやったり、水をまいたり、草ぬきをしたり、健作さんは朝から晩まで野良仕事に精を出していました。ある日のこと、健作さんがいつものように野良仕事をしていて、ふと目を上げると畑の端の桜の木のかげに、見かけない男の子が座っていました。小学校の一、二年生といった年頃の男の子が木かげに座ってこっちを見ているんです。どこの子かな？と気になりましたが健作さんはかまわず仕事を続けました。でも、しばらくして目を向けると、その子はまだじっと同じ所に座っています。

健作さんの畑には、ちょうどその時、食べ頃のキュウリやトマトがどっさり実っていました。健作さんは畑の中から、大きなキュウリとまっ赤にうれたトマトをもぎ取って、「食べるかい？」と、その子に差し出しました。きっと、のどがかわいているだろう、と思ったんですよ。その子は、健作さんからもらったキュウリとトマトを、それはそれはおいしそうに、食べました。トマトなんか、ヘタまで残さず、ぺろりと食べてしまったそうですよ。そしてね、その日から毎日、その子は健作さんの畑にやって来るようになりました。いつの間にかやって来て、気がつくと同じ桜の下から、にこにこ楽しそうに健作さんの野良仕事を眺めているんです。健作さんもその子が来るのが楽しみになって、休けいの時には、家から持って来たお菓子なんかをその子といっしょに食べたりするようになりました。その子、何もしゃべりませんでしたけれど、おまんじゅうでもおせんべいでもいつもおいしそうに喜んで食べたそうです。一度健作さんがクーラーボックスにアイスクリームを入れて持っていったら、ひどく気に入って、アイスのカップの底からフタからずっとぺろぺろなめていたそうですよ。

その年は雨の多い年でした。ほら、あなたの家の近くに^{やつか}矢束川という小さな川があるでしょう？

今では治水工事のおかげであふれたりはしませんが、健作さんの時代にはあの川がしょっちゅう氾濫して大きな被害が出たものです。

ある日のことです。その日は夜明け前から雨が降り始め、どしゃ降りが続いていました。この辺りの人は皆、矢束川があふれはしまいかと気が気ではなかったんですが、雨は日暮れ時になっても一向にやみません。そんな時です。健作さんの家の玄関のベルが鳴ったのは……。いったい誰だろう？と、健作さんがドアを開けてみると、あの子が立っていました。そう。いつも畑にやって来るあの子ですよ。傘もささず、ずぶぬれで雨の中に立っていたんです。

そしてその子は真剣な顔で言いました。

“ぼくの言う通りにしてね。家と畑のまわりをぐるっと囲むように、この棒で地面に線を引くんだよ。とっても大切なことだから、言う通りにしなくちゃダメだよ。必ず、この家と畑のまわりを囲むように線を引いてね”

そう言うとその子は、健作さんの手の中に一本の木の棒を押しつけるなり、あっという間に雨の中に駆け出して行ってしまったんです。」

蔵守猫の話に聞き入っていたユウ太は、ハッとして目の前にある木の棒を見つめました。

「そうです。この棒ですよ」と猫が言いました。「この棒で家と畑のまわりに線を引けとその子は言ったんです」

「それで、どうなったの？」

ユウ太は聞かずにはいられませんでした。猫はもったいぶるように前脚でちょっと顔を洗い、それからまた口を開きます。

「健作さんはね、その子のようにすがあんまり真剣で必死だったものですから、言う通りにすることにしたんですよ。どしゃぶりの雨の中、レインコートを着てその子からもらった木の棒で地面をひっかいて、家と畑を囲む線を引っぱってまわりました。不思議なことに、その棒でひっかくと地面には、ぼんやり光る光の筋が描かれたそうです。健作さんは光の筋で家と畑のまわりをぐるりと囲んだんです」

蔵守の猫は話し疲れたのか、あくびを一つ。それから話の先を続けました。

「その夜、矢束川が氾濫しました。この辺り一帯は水びたしになったのに、光の線で囲んだ健作さんの家と畑にだけは、どういうわけか水は少しも流れこまなかったそうです」

「その子、誰だったの？」

ユウ太がまたたずねると、猫は金銀の目でじっとユウ太を見つめ耳を動かしました。

「矢束川の水神様の使い？それとも河童？あたしにはわかりませんよ。あたしはただ、この蔵にしまわれた物語を守っているだけなんですからね」

ユウ太がもっと何かたずねようと口を開きかけた時、蔵守猫はぐうんと体を伸ばして大きなのびをしました。そして、ユウ太の目の前から煙のように消えうせてしまったのです。

残ったのはガラクタと、あのつまらない棒だけ。でもユウ太はもう、この蔵の中の物をつまらないとは思いませんでした。

どこかで鳴き出したカナカナの声が聞こえました。